



# ミンガラバー

認定 NPO法人  
日本・ミャンマー  
医療人育成支援協会  
〒700-0815  
岡山市北区野田屋町2-4-18  
TEL: 086-224-0102  
FAX: 086-221-2554  
URL: http://www.mjcp.or.jp



架け替えられた鉄筋コンクリート造りの「北村橋」。向こうが小学校

↑  
以前の竹の橋。富安さんらが3月に訪れた時、一行はこわごわ渡ったニイナウン村



## 通学路に頑丈な橋

### ニチニチ製薬寄付

ミャンマーを襲った10年前の巨大サイクロンで流された村の小学校が、協会賛助会員の広島県東広島市の医師富安基晴さんの寄付で再建されたのに続き、ここでは通学路の竹の橋が頑丈な鉄筋コンクリート造りに架け替えられた。取付道路の舗装も含めた工事費と学校の遊具を三重県伊賀市のニチニチ製薬が寄付し、11月28日、贈呈式があった。

ニイナウン村は大河エーヤウェイ川支流の河口近くにある。2008年のサイクロンでは人口約200人のうち4分の3の155人が死亡する壊滅的な被害を受けた。10年経った今では避難先から帰ってきた村民に次々と子供が生まれ、以前とほぼ同じ人口に戻った。小学校前を流れる幅10メートル余の川に架かってきたこれまでの橋は、竹が渡してあるだけ。そこを登下校の児童や農作業の大人が、曲芸のように行き来していた。新しい橋はサイクロンの襲来にも耐えられ、いざという時にはここを

ニイナウン村は大河エーヤウェイ川支流の河口近くにある。2008年のサイクロンでは人口約200人のうち4分の3の155人が死亡する壊滅的な被害を受けた。10年経った今では避難先から帰ってきた村民に次々と子供が生まれ、以前とほぼ同じ人口に戻った。小学校前を流れる幅10メートル余の川に架かってきたこれまでの橋は、竹が渡してあるだけ。そこを登下校の児童や農作業の大人が、曲芸のように行き来していた。新しい橋はサイクロンの襲来にも耐えられ、いざという時にはここを



富安さんらのグループは日本から富持ち込んだ笛、太鼓の演奏で贈呈式を盛り上げた

長の名前をとった「北村記念産院クリニック」を寄付している。新しい橋は「北村橋」と名付けられ、贈呈式には同製薬の嶋田貴志さんのほか、小学校を寄付した富安さんと知人の歯科医や看護師も出席した。富安さんが3月、この村を訪れた時はまだ校舎は建築中だったが、予定通り6月に開校し、10月に公立学校として認可され、教員は3人で、就学児は23人。贈呈式には農作業などで学校に行けない子供も含めて42人が揃い、村民も総出で祝った。

## 8人の子ども 目に光

### 先天性白内障 岡山のNPO、手術支援



④手術後の眼底検査をするタントウンアウン医師  
⑤手術を受けた8人の子どもたちと基金のメンバーらが記念撮影。ヤンゴンの国立眼科病院

ミャンマーで、このままでは失明する先天性白内障の子ども8人の目が10月、手術によってはつきり見えるようになった。岡山市のNPO法人「ヒカリカナタ基金」(竹内昌彦理事長)が手術費用などを出し、その橋渡しを協会の岡田茂理事長が行った。

竹内さん(73)は8歳の時に失明。東京教育大学卒業後、岡山県立岡山盲学校で教諭、教頭を務めた。退職後、各地で講演や点字ブロック発祥の地(岡山市中

区原尾島交差点)への石碑建立運動に取り組んだ。またモンゴル、キルギスに盲学校をつくったり、中央アジア諸国で子どもたちの目の手術を支援したりする活動を中心になって進めてきた。「ミャンマーでも手術を

したら目が見えるようになる子どもがいまいませんか」。ヒカリカナタ基金から相談を受けた岡田理事長は協会ヤンゴン支部長のミョウキ元国立医学研究局長や国民健康財団のタンセイン理事長らに連絡。その結果、手術が可能な子どもがヤンゴンや周辺の地域にいることがわかった。その中から8人が10月12日、ヤンゴンの国立眼科病院でタントウンアウン医師(小児眼科)の手術を受けた。同医師は白内障手術の最新技術をオーストラリアで勉強してきたばかり。ヒカリカナタ基金から竹内さん、副理事長の谷口真吾さんら6人がヤンゴンを訪れ、同行の岡田理事長とともに手術に立ち会った。

外国製の眼内レンズや麻酔薬のほか、子どもと付き添いの家族の旅費や滞在費に、基金からの支援金が充てられた。翌13日、8人の目を覆っていた眼帯が外された。怖がる子、不安そうな家族、緊張して見守る基金のメンバー。次の瞬間、笑顔と喜びが弾けた。手術成功。8

人全員に光が届いていた。子どもたちは眼底検査を受けたが、眼圧には異常がなかった。タントウンアウン医師によると眼内レンズが最新のものでうまくフィットしたのでだろうという。竹内さんは岡田理事長に「費用を集めてまたミャンマーで手術支援をしたい」と話していた。

## 瑞宝中綬章を受ける

### 秋の叙勲 岡田理事長

11月3日付で発表された秋の叙勲で、協会の岡田茂理事長が瑞宝中綬章を受章した。瑞宝章は長年にわたって公共業務での活躍をたたえ

る實で、受章者は公務員が主な対象。岡田理事長は岡山大学教授、医学部長を務め、定年後、ミャンマーの医療支援のため協会を設立、活動してきた。

# チャイントン総合病院 病理検査技師 ナガシヤさん

協会の招きでこの秋、ミャンマーのシャン州にあるチャイントン総合病院の病理検査技師ナガシヤさんが岡山市内の病院2か所研修を受けた。かつて協会に招かれて岡山で勉強した病理医が同病院に赴任したのが縁で来日した。以下は、ナガシヤさんの岡山での印象を交えた研修記です。

研修先の岡山大学医学部病理学教室で、前列中央がナガシヤさん、その左が松川昭博教授



## 2病院で2ヶ月半研修

私は岡山協立病院で1か月、岡山大学医学部で1か月半の研修を受けました。まず気が付いたのは病院は清潔で、備品などが揃って整然として、近代化しているという点でした。最初の研修は暖かい出迎えていただきました。皆さんは心優しく、友好的でした。私も彼らの仕事熱心、立派な態度、規則正しさ、しつけの良さを見習いました。私にとって非常に役立つ、生産性のある研修でした。免疫病理の研修ばかりでなく、一般的な病理検査に役立つ多くの技術も習得することができました。帰国後は同僚にもこの知識を分けたいと思います。

### 習得技術、役立っています

これまで日本について知っていたことは、近代化され、技術が進歩しており、人々の性格、しつけの良さということでした。実際、岡山で生活してみても、日本の生活水準、交通の便、教育、作法の良さを実感しました。日本料理を試してみても大きなチャレンジでした。

### 日本の良さ実感

チャイントンはシャン州の東側に位置し、山岳地帯の美しい所です。多くの部族が住んでおり、シャン族、ラフ族、アカ族、ワ族などがその例ですが、まだ他にもいます。それぞれの部族には特有の言語と文化があり、多くの人々は農業や畜産、交易に従事しています。チャイントン総合病院は2000ベッドの郡病院です。私が病理検査室で働いている結果では、最も多いがんは子宮がん、消化器がん、乳がんと若い年代の卵巣がんでした。岡山の研修で習得した技術がこれらの患者の病理診断に役立ちます。

### 編集後記

かねて、その献身的な活動ぶりは聞いていましたが、直接、本人の話を伺うのは初めてでした。竹内昌彦さん。途上国に住む盲目の子どもたちを支援するため、自らが立ち上げた「ヒカリカナタ基金」の活動報告会が11月10日、岡山市内であり、岡田茂理事長に誘われて出かけました▼キルギス、ネパールなど中央アジア諸国での実践と合わせ、直近の10月にミャンマーで実施した活動が詳しく報告されました。先天性白内障の子8人の手術の様子と成功の喜び。その模様をスクリーンに映しながら説明した同基金の理事は「こちらが感動を貰って帰ってきました」と結びました▼報告会の冒頭と最後、竹内さんが繰り返す、こう話しました。「治せるものなら、治してあげたい」。心に響く言葉でした。(西崎)

### 岡山大病院を視察

ミャンマー2医師  
ミャンマー国民健康財団理事のティルウィン医師とチャウンゴン郡立病院のエイナイン院長が10月18日、仙谷さんは協会の活動に理解があり、今年度スタートしたミャンマーでの医療機器管理人材(メデイカルエンジニア)育成プロジェクトの実現などに尽力した。

## 2千400人訪れる

### 日本留学・就職フェア



岡山大学ブースにも大勢の留学希望者が詰めかけた=ヤンゴン、ノホテルホテル

ミャンマーの最大都市と第2都市で8月、岡山大学連の催しが相次いで開かれた。ヤンゴンの日本留学・就職フェアとマンダレーでの同窓会支部の発足。いずれも協会から岡田茂理事長と木股敬裕理事(岡山大病院形成外科教授)が出席した。

日本留学フェアは8月18日、ヤンゴンに現地事務所を置く岡山大学日本留学情報センターが中心になって市内のホテルで開催された。ミャンマーから日本へ留学を希望する学生らに対し、受入れの情報提供や助言、支援などに当たっているのが同センター。文科省の日本留学海外拠点推進事業として、ミャンマーについては岡山大が中核になっており、現地事務所ではコーディネーターが常駐して留学相談などに応じている。フェアでは横野博史学長や丸山市郎・駐ミャンマー日本大使が挨拶。岡山大をはじめ東大、京大など21大学と日本語学校9校がブースを設けた。

同じホテルでは日本就職フェアも開かれ、日本企業10社が窓口を設けた。

### 岡山大国際同窓会支部

### マンダレーにできる

8月19日、マンダレーのホテルで、岡山大学国際同窓会マンダレー支部の発会式があった。35人が集まり、支部長にマンダレー医療技術大学のミヤマイエ子学長が就任した。

会員はかつて岡山大に留学したり、同大で研修を受けたりしており、大半は医師ら医療関係者。協会の招きや、協会の呼びかけにこたえて来た人も多い。今はマンダレー医科大学や市内の医療系大学、病院で指導者や若手リーダーとして活躍している。

日本企業への就職に若者の関心が大きいことがうかがわれた。

### 20人、准助産師に

### あかね基金4期生

西山央子理事設立の奨学制度「あかね基金」を受けて准助産師をめざした4期生20人が半年間の研修を終え、修了式が10月15日ヤンゴンのホテルであった。同理事は全員に聴診器、血圧計、幼児用体重計、ガウンなどがセットの、お産キックを贈り、門出を祝った。

### 協会だより

協会の招きで岡山を訪れ、6日間滞在。岡山大学国際同窓会総会に出席し、同大病院や玉野市の老健施設コスモスを視察した。2人の医師は、西山央子理事がミャンマーを進める准助産師育成事業の運営や教育面で深く関わっている。

### 参列し故人しのぶ

### 仙谷さんお別れ会

民主党政権での内閣官房長官や日本ミャンマー協会の副会長を務めた故仙谷由人さんのお別れの会が11月30日、東京都内のホテルであり、岡田理事長と木股敬裕理事が参列した。お別れの会では与野党の国会議員ら約千人が故人をしのんだ。